夏目漱石『こゝろ』

――「私」の「真面目」――

東　典幸

一

夏目漱石「こゝろ」の先生と「私」については、大きく分けてふたつの見方がある。ひとつは、両者の人間性は異なり、「私」は先生の死を乗り越えて生きてゆく、という考え方だ。その代表が小森陽一[1]や石原千秋[2]であるのは言うまでもない。もうひとつは、両者の類似性に注目する考え方だ。断片的な引用の羅列になるが、「精神的同族」（江藤淳「明治の一知識人[3]」）、「先生のミニチュア」（越智治雄「こゝろ[4]」）、「精神的同族」（桶谷秀昭「淋しい「明治の精神[5]」」）、「人生の仰ぐべき先行者」（佐々木雅發「静の心、その他[6]」）などと言われているのを代表として選んでおきたい。

右に挙げた後者については、ほかに蓮實重彦の発言がある。小森石原との鼎談「『こゝろ』のかたち[7]」でのものだ。

気になるのはあの「私」の文体と、それから「先生」の文体との差異のなさなんです。あたかも「私」が「先生」になり代わって語っているかのように、ほとんど「先生」と「私」の文体に差異がないというところがもう一つ、非常に気味が悪い。漱石がそんなことに気が付いていないはずないと思う。気が付いていないはずがないのに、いくつか文体上の特徴さえ拾い上げるくらいに、同じ言い回しをしている。

次の問題として、この作品には、少なくとも「私」という形で自分を指示する人物が二人存在するという事実

が気になります。第一の人物は話者であり、第二の人物は話者に与えられた手紙に語られている物語の話者であるわけですね。それを、漱石は、ことによったら、どこかで融合させようというような意図さえあったかと思うほど、その二つの「私」の反応等は似ている。それがまた非常に薄気味悪い。

その理由として、蓮實重彦は、「おそらくフィクションというものは、「私」という一人称の主語が同じ作品の中に二つ出てきたら、似ざるを得ないという宿命を背負ってんじゃないかって気がするんですね。少なくても、ある種の近代小説の中で、明らかに帰属の違う「私」という言葉が書かれていても、形式的に類似せざるを得なくなっちゃうんじゃないか」と述べている。これは、「こゝろ」という作品が、ほとんどの人物に名が無く、ほとんどの社会的背景が括弧にくくられた「抽象化された世界」であるためだ、ということになる。

ただ、両者のディスクールは異なる、と蓮實重彦は付け加える。

「先生」は、自分の物を書き始める時に、ほとんど自分は書き慣れてない人間だから、ペンがうまくすべらないんじゃないかみたいなことを言ってる。ただし、書き慣れてないけれども、筆を取ると、何かそこに文字が形成されていく時に、ある喜びみたいなものがあるみたいなことを「先生」は最初に書いている。そこには何があるかと言うと、素人性ということだと思うんです。（略、それに対して）「私」の手記は明らかに読者、複数の読者を想定しているものであって、あれは作家なんですよね。あの「私」は作家でなければいけない。作家でなければいけないというのは、論理的な帰結として、ここではこういうことは語らずにおくとか、つまり結論の先伸ばしであるとか、わかっている事実を最後まで隠しておくとか、実に作家的な配慮があり、その作家的な配慮の中で、書簡体の小説というとちょっと違うんですけれども、おそらく漱石が知っていたであろう書簡体というものを、その後で注入するという点においては、ディスクールとしては、全部逆のこと、やってると思うんです。

鼎談相手の小森石原にしてみれば、彼らが先生と「私」

の違いを主張してきたことからすれば、蓮實重彦に文体の差異のなさを指摘され、「どきっとするところがありました」。小森陽一の『『こころ』を生成する心臓（ハート）」には次のようにあり、両者の違いが説明されている。

決して相手を「冷たい眼」で「研究」するようなかかわり方をしないこと、それが「先生」との「人間らしい温かい交際（つきあい）」を支える「私」の姿勢であった。しかもそれが「自覚」されていない「私」の自然なあり方であったからこそ、「尊（たっと）むべきもの」だったのでもある。人の「心に向かって、研究的に働き掛け」るようなかかわり方とは、とりもなおさず人の「こころ」を、観察と分析によって対象化、客体化すること、いわば事物と等しいモノとしてとりあつかうことだ。そのとき他者は、主体に対する客体として引き離され、単なる観察され、分析される、実験材料のごとく、限りなく私の「こころ」から遠ざけられてしまう。そのようなかかわり方を、明確に拒否したところに、「私」と「先生」を「繋ぐ同情の糸」が結ばれ、そしてつながりつづけてきた最大の理由があるのだ。

実は、他者を「冷たい眼」で観察し、「研究的」にしかかかわることのできなかった人間の告白が、「先生」の遺書だったのである。

先生の眼の冷たさについて、小森陽一は、たとえば、先生がKの恋の告白を「彼自身の手から、彼の保管している要塞の地図を受け取って、彼の目の前でゆっくりそれを眺める」態度でいた場面（下四十一）などを挙げている。

鼎談ではいささか恐縮の体であった小森陽一ではあるが、どちらかというと、私は蓮實重彦の説により多く疑問を感じる。もともと、「私」の手記が「小説的な書き方」で、対して、先生の遺書が「手記としては、普通の、尋常な書き方」になっている点は、小森陽一の指摘による。これを蓮實重彦は、ディスクールの違いと見て、文体はやはり同じである、と説明したのだ。私にはいささか苦しい釈明のように思われる。「ディスクールの違い」は職業的な語り口の違いにすぎないのだろうか。これは後で考えたい。

反面、蓮實重彦のような意見が出るのもわからないではない。私自身、「こゝろ」について人と話しているうち、

「私」についてと先生についてで、話題が混乱した経験が何度かある。ただ、私の実感は、冒頭で挙げた論文でも従来よく論じられてきたような、両者の類似性にとどまるものだろう。問題は、蓮實重彦が、「いくつか文体上の特徴さえ拾い上げるくらいに、同じ言い回しをしている」と述べている点だ。魅力的な指摘なのだが、残念なことに、この鼎談では具体例が挙げられていない。私が自分で見つけるより無いが、むしろ見つかるのは反例の方だった。たとえば、先生は多用するが「私」はほとんど使わない表現として、「たった一人」のほか、先生の気質をよく表現する「ぐるぐる」や、[8]「教育」という語に強いエリート意識をこめる口ぶりなどがある。[9]

すると残るのは、「こゝろ」のように抽象化された作品世界において、「「私」という一人称の主語が同じ作品の中に二つ出てきたら、似ざるを得ないという宿命を背負ってんじゃないか」という問題提起である。これについては、似た抽象性を有する作品どうしの「私」を比較すればいい。たとえば、志賀直哉の『和解』や『暗夜行路』はどうだろう。中村光夫の有名な批判を想起すれば、[10]この比較は有効だと思う。不安定な気分に左右される、志賀作品の「私」が「こゝろ」の理性先行の「私」たちに似ているとは思えない。よって、この説もいまは退けておきたい。ただ、志賀直哉の場合は「私」ではなく「自分」であるが。[11]

先生と「私」の類似を最も強く主張したのが蓮實重彦なので、ここで詳しく取り上げた。私は、両者が似ているにしても、違いの方が重要であると思う。実は、冒頭で挙げた、江藤淳、越智治雄、桶谷秀昭、佐々木雅發もそのような立場だ。

二

類似している、ということでは、先生とKが似ている、という説も古来多い。しかし、私には違いの方が目立つ。重要な一点だけ触れておこう。[12]

先生に明らかなのはエリート意識だ。一方、Kの考えていることはニーチェを念頭に置くとわかりやすい。一言で言えば超人への意志だ。二人の関係は超人対エリートという図式で理解することができよう。先生はKをこう評した、「彼はこうなると恐るべき男でした。偉大でした。自分で自分を破壊しつつ進みます」（下二十四）。禁欲的な修行によってKが破壊する自分とは、自分の人間性に他なら

ない。下三十で彼が言う「精神的向上心」とは、人間を乗り超えて超人になろうとする意志である。禁欲自体にニーチェは好意的ではなかったが、禁欲的生活と禁欲的理想を分けて考えれば、彼が攻撃したのは後者であることはわかる。この点について、下二十五の象徴的な一節を引用しておく。

火鉢に火があるかと尋ねると、Kは無いと答えるそうです。では持って来ようと云うと、要らないと断るそうです。寒くはないかと聞くと、寒いけれども要らないんだと云ったぎり応対をしないのだそうです。

Kは禁欲的理想を説かない。禁欲的生活を送るだけなのである。対して、先生は弟子に向かってことさらに説教して、Kの禁欲を批判する（下二十四）。この場合、重要なのは禁欲的か否かではなく、理想を説教するかどうかの違いだ。ニーチェが本当に攻撃するのは、みづからは禁欲できないために、それを批判する祭祀的な説教者なのである。

こう考えると、先生とKの立場の違いが鮮明になる。Kが人間を超えようとするのに対し、多くの言及がすでになされてきたとおり、先生は人間にしがみつく。これが超人を志すことのできない弱者のルサンチマンであるのは言うまでもない。先生は「人間らしい」を連発する。

その時私はしきりに人間らしいという言葉を使いました。Kはこの人間らしいという言葉のうちに、私が自分の弱点のすべてを隠していると云うのです。（下三十一）

Kの指摘はほとんどニーチェに等しい。強者になれない先生は、弱者としての自分を正当化するために「人間らしさ」を持ち出しているのだ。すると、先生の遺書はこうした弱さの告白だったのだろうか。いや、彼に罪の意識はあってもルサンチマンの自覚は無い。それはルサンチマンの特徴のひとつでさえある。それゆえ、罪の意識も、彼のエリート意識をいささかも揺るがさない。彼は人間の代表として罪を犯したのだ。[13]「私はただ人間の罪というものを深く感じたのです」（下五十四）。彼は罪を認めても謝罪はしない。エリートらしく、後世に教えを残そうとしている、「私は私の過去を善悪ともに他の参考に供するつもりです」

（下五十六）。

しかし、先生の遺書は彼の意識を超えた。この点については、「こゝろ」を書き始める少し前の講演「模倣と独立」[14]が参考になる。

元来私はこういう考えを有（も）っています。泥棒をして懲役にされた者、人殺をして絞首台に臨んだもの、――法律上罪になるというのは徳義上の罪であるから公（おおやけ）に所刑せらるるのであるけれども、その罪を犯した人間が、自分の心の径路をありのままに現わすことが出来たならば、そうしてそのままを人にインプレッスする事が出来たならば、総ての罪悪というものはないと思う。総て成立しないと思う。それをしか思わせるに一番宜（よ）いものは、ありのままをありのままに書いた小説、良く出来た小説です。ありのままをありのままに書き得る人があれば、その人は如何なる意味から見ても悪いということを行ったにせよ、ありのままをありのままに隠しもせず漏らしもせず描き得たならば、その人は描いた功徳に依って正（まさ）に成仏することが出来る。

なぜこんなことが言えるのか。「自分の心の径路をありのままに現わす」とは、一切の抽象化や一般化を排して罪を書くことであり、実際、罪が文字通り比類のないものであれば、その罪びとにしかありえなかった単独唯一の事情はそのように書くしかない。それは他の判例との比較を許さず、罪を犯すにいたった本人と読者にしか理解できない事例になるので、罪が成立しなくなるからだ。

本来、先生の思索は単独性と無縁である。一般化とその事例で考える、類と種の論理的な推論が彼の人間観を形成している。たとえば、叔父が信用できなくなれば、人間全体が信用できなくなり、したがって、妻も信用できなくなる、という思考パターンによく表れている。しかし、その彼が最後の最後に自分の単独唯一の事情を語りつくし、「よく出来た小説」としての遺書を仕上げるのが「こゝろ」なのである。

なぜ先生は遺書を書けたのか。言うまでもない。「私」のおかげである。次章で「私」について考えたい。その前にひとつだけ確認しておこう。彼の手記の問題である。周知のとおり、小森陽一と石原千秋によれば、これは公表される手記だ。しかし、私は、佐々木雅發の述べたように、

「誰の目にも触れさせず、久しく筐底深く秘していたもの」と考えるのが自然であると思う。公表しないということは、「妻が生きている以上は、あなた限りに打ち明けられた私の秘密として、すべてを腹の中にしまっておいて下さい」（下五十六）という依頼を実行したことにはなる。ではなぜ彼は書くのか。佐々木雅發の考えでは、「私」は先生の孤独を自分のこととして実感する身になっている。すると、思い返されるのは、先生の孤独を知らなかった時分の「軽薄」な自分なのである。

〈私〉はこの時、直ぐ〈眼の前に控え〉ていた先生の〈死〉に〈気が付かなかつた〉ばかりか、やがて来るであろう自らの孤独な運命にも、〈気が付かなかつた〉のである。（しかも〈私〉は〈今〉、そのことを臍を噬む思いで思い起しているのだ。）

手記を書くことで少しでもこの「臍を噬む思い」を浄めようとしている。「私」も「良く出来た小説」を試みる一人なのだ。そう考えたうえで、付け加えたいことがある。先生の孤独は個人的な問題ではあるが、孤島のような誰とも無縁の空間に取り残された種類の孤独ではない。身近な者を巻き込んでしまう。ここに割り切れなさが残るのである。言うまでもなく、私は奥さんを問題にしている。奥さんに対し先生の秘密を守っていることについて、「私」には負い目があるはずだ。奥さんがとっくに秘密に気づいているなら、それは解消されるし、そう考えることもできないではなさそうな気もするのだが、実際そう考えるのは欺瞞だろう。「私」が手記を書く動機のひとつはその確認にある。先生について奥さんと語り合った一夜について、「これは書くだけの必要があるから書いた」（上二十）と明言されているとおりだ。

奥さんは先生の秘密について「今でもそれを知らずにいる」（上十二）という、研究者の多くが注目する重要な一節がある。再び佐々木雅發から引用すれば、あの一夜の記憶があるからこそ、「〈今でもそれを知らずにゐる〉ということを、〈私〉はたしかな確信をもって断言していたといえよう」。それはまた、「私」は先生の秘密を書けないということの確認でもある。これは、手記を奥さんに見せず秘めておくにしても、書けない。書くとはそういう作業なのだ。簡単に言えば、読まれる意識がつきまとう。だから、

汽車に飛び乗った時点で彼の手記は中絶してしまう。もちろん、それ以前の時点でも書けない。蓮實重彦はこれを「わかっている事実を最後まで隠しておく」エクリチュールだと述べたわけだが、そうではなく、「私」は書けないのである。「こゝろ」の編集意図とは別に、「私」の手記それ自体は先生の遺書への導入部分ではなく、独立した動機に基づいて書かれている。すでに引用した「臍を噬む思い」と、私が付け加えた「割り切れなさ」がそれだ。そして、秘密を隠している以上、手記は「良く出来た小説」にはならない。遺書を書き終えた先生と同じ充足感に「私」が満たされることは無いのである。

三

作品を読むだけで、作者夏目漱石の探偵嫌いはうかがい知れる。第一作の「吾輩は猫である」からすでに「およそ世の中に何が賤しい家業だと云って探偵と高利貸ほど下等な職はないと思っている」と書かれているのはよく知られている。漱石自身のエピソードとしては、妻夏目鏡子「漱石の思ひ出」にロンドン留学時の出来事が紹介されている。「下宿の主婦姉妹が（略）まるで探偵のように、人のことを絶えず監視してつけねらっている。いやなやつったらない」。この当時の記憶が、帰国した後で自分の長女に手を上げる原因になるあたり、常軌を逸してもいよう。

長女の筆子が火鉢の向こう側にすわっておりますと、どうしたのか火鉢の平べったいふちの上に五厘銭が一つのせてありました。べつにこれを筆子が持って来たのでもない、またそれをもてあそんでいたのでもありません。ふとそれを見ますと、こいついやな真似をするとか何とかいうかと思うと、いきなりぴしゃりとなぐったものです。何が何やらさっぱりわかりません。筆子は泣く、私もいっこう様子がわからないから、だんだんたずねてみますと、ロンドンにいた時の話、ある日街を散歩していると、乞食があわれっぽく金をねだるので、銅貨を一枚出して手渡してやりましたそうです。するとかえってきて便所に入ると、これ見よがしにそれと同じ銅貨が一枚便所の窓にのってるというではありませんか。小癪な真似をする、常々下宿の主婦さんは自分のあとをつけて探偵のようなことをしていると思っていたらやっぱり、推定どおり自分の行動は細大洩らさず見ているの

だ。しかもそのお手柄を見せびらかしでもするように、これ見よがしに自分の目につくところにのっけておくとは何といういやな婆さんだ。実にけしからんやつだと憤慨したことがあったのだそうですが、それと同じような銅貨が、同じくこれ見よがしに火鉢のふちにのっけてある。いかにも人を莫迦にしたけしからん子供だと思って、一本参ったのだというのですから変な話です。

ほか、向かいに下宿している学生は自分を監視している探偵である、と思い込んだ漱石が、この学生に向かって「おい探偵君」と何度も怒鳴っていたことが語られている。

プライバシーを侵害されたくない、と思うのは誰しものことながら、漱石の場合には特別に個人的なこだわりが感じられる。問題は、なぜ探偵を嫌うかだが、漱石作品の多くの場合、人の行動を探る探偵行為それだけで端的かつ強烈に非難されている。そこには「なぜ」を問うことを許さぬ気味さえある。

いっそのこと黙って後を付けて行く先を見届けようか、それではまるで探偵だ。そんな下等な事はしたくない。（「趣味の遺伝」）

人から頼まれて他を試験するなんて、――ほかの事だって厭でさあ。ましてそんな……探偵じゃあるまいし……（「行人」）

かえって理由を丁寧に説明された場合の方があやふやである。「吾輩は猫である」と「趣味の遺伝」から引くが、前者は探偵を比喩的に言い換えているだけで「なぜ」の説明になっていないし、後者は探偵よりも批評家や心理学者にこそ当てはまる批判であろう。特に前者は現代個人主義の批判につながってゆき、一見重要な漱石的課題を思わせるが、これも探偵特有の問題には見えず、取って付けた感がある。

探偵と云う言語を聞いた、主人は、急に苦い顔をして「ふん、そんなら黙っていろ」と申し渡したが、それでも飽き足らなかったと見えて、なお探偵について下のような事をさも大議論のように述べられた。

「不用意の際に人の懐中を抜くのがスリで、不用意の際

に人の胸中を釣るのが探偵だ。知らぬ間に雨戸をはずして人の所有品を偸(ぬす)むのが泥棒で、知らぬ間に口を滑らして人の心を読むのが探偵だ。ダンビラを畳の上へ刺して無理に人の金銭を着服するのが強盗で、おどし文句をいやに並べて人の意志を強(し)いるのが探偵だ。だから探偵と云う奴はスリ、泥棒、強盗の一族でとうてい人の風上に置けるものではない。そんな奴の云う事を聞くと癖になる。決して負けるな」

人間もその日その日で色々になる。悪人になった翌日は善男に変じ、小人の昼の後に君子の夜がくる。あの男の性格はなどと手にとったように吹聴する先生があるがあれは利口の馬鹿と云うものでその日その日の自己を研究する能力さえないから、こんな傍若無人の囈語(げいご)を吐いて独りで恐悦がるのである。探偵ほど劣等な家業はまたとあるまいと自分にも思い、人にも宣言して憚(はば)からなかった自分が、純然たる探偵的態度をもって事物に対するに至ったのは、すこぶるあきれ返った現象である。

探偵への嫌悪はよく自覚された明確な倫理観ではなく、説明不要の根源的な感情のようだ。それだけに根深いものがうかがえる。つまり、人には、個人が個人であるゆえんの根源的な孤独がある。そして、それがその人の本質であるからこそ、探偵はのぞきに来る。そのとき、当然、この孤独は崩されてしまう。その人はその人でなくなってしまう。特に、留学時の漱石にとって、好むと好まざるとにかかわらず、孤独が存在証明であった。探偵はそんな彼の実存を脅かしたのであろう。

さて、そうは言いながら、夏目漱石の作品では探偵的興味を有する主人公が好意的に描かれるのも確かである。初期からその傾向はあり、「吾輩は猫である」の猫は好んで人間界を探偵する。ほか、「趣味の遺伝」も挙げることができよう。「草枕」も、画工が那美を探偵する話として読めないではない。中期以降の作品では、「彼岸過迄」の敬太郎が「警視庁の探偵見たような事がして見たい」と言う。探偵の性格が魅力とともに明瞭に語られている。

元来探偵なるものは世間の表面から底へ潜る社会の潜水夫のようなものだから、これほど人間の不思議を攫(つか)んだ職業はたんとあるまい。それに彼らの立場は、ただ他(ひと)

の暗黒面を観察するだけで、自分と堕落してかかる危険性を帯びる必要がないから、なおの事都合がいいには相違ないが、いかんせんその目的がすでに罪悪の暴露にあるのだから、あらかじめ人を陥れようとする成心の上に打ち立てられた職業である。そんな人の悪い事は自分にはできない。自分はただ人間の研究者否人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様を、驚嘆の念をもって眺めていたい。――こういうのが敬太郎の主意であった。

探偵が探るのは「人間の不思議」や「人間の異常なる機関が暗い闇夜に運転する有様」である。私の述べた「根源的な孤独」と重なる言葉と見ておきたい。

「こゝろ」に「探偵」は使われない。代わりに「研究」が四例あり、うち三例が次の箇所にまとめて現れる。この「研究」は「探偵」に変換しても文章の意味が変わらない、と私は思う。

私は先生を研究する気でその宅へ出入りをするのではなかった。私はただそのままにして打ち過ぎた。今考えるとその時の私の態度は、私の生活のうちでむしろ尊むべきものの一つであった。私は全くそのために先生と人間らしい温かい交際ができたのだと思う。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向かって、研究的に働き掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなくその時ふつりと切れてしまったろう。若い私は全く自分の態度を自覚していなかった。それだから尊いのかも知れないが、もし間違えて裏へ出たとしたら、どんな結果が二人の仲に落ちて来たろう。私は想像してもぞっとする。先生はそれでなくても、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れていたのである。（上七）

すでに引用したように、小森陽一は「研究的」な態度とは、「人の「こころ」を、観察と分析によって対象化、客体化すること、いわば事物と等しいモノとしてとりあつかうこと」だと述べている。しかし、この場面の文脈をたどれば明らかだが、先生が「絶えず恐れていた」のは、雑司ヶ谷に通う理由を探られることであり、小森陽一が現象学的に解釈したような視線の問題ではない。先生は自分の根源的な孤独を探偵されたくないのである。それは右の引用に続いて、「淋しい人間」が話題になることからも明らか

ではないか。

さて、雑司ヶ谷への墓参の理由を問わなかった「その時の私の態度」が続いてしまえば、「人間らしい温かい交際」も続いたろうが、先生の遺書が「私」に贈られることも無かったろう。「私」は先生の秘密に迫らねばならないのである。ただし、探偵的にではなく。

先生の過去が生み出した思想だから、私は重きを置くのです。二つのものを切り離したら、私にはほとんど価値のないものになります。私は魂の吹き込まれていない人形を与えられただけで、満足はできないのです」

先生はあきれたといった風に、私の顔を見た。巻烟草を持っていたその手が少し顫えた。

「あなたは大胆だ」

「ただ真面目なんです。真面目に人生から教訓を受けたいのです」

「私の過去を訐(あば)いてもですか」

訐くという言葉が、突然恐ろしい響きをもって、私の耳を打った。（上三十一）

敬太郎の「驚嘆の念をもって眺めていたい」と、「私」の「真面目に人生から教訓を受けたい」を比べればいい。探偵のようにただ秘密をあばくのでなく、それを自分のこととして引き受ける人物、「こゝろ」の成功は、そんな「私」のような人物を造形できたことによる。そして、それは「明暗」で津田の秘密に迫る延(のぶ)に受け継がれるはずだったろう。「行人」のHさんと比べてもいい。Hさんは一郎からかなりの話を引き出してくれたが、「真面目に人生から教訓を受けたい」という態度は無いゆえ、一郎も結尾でつかの間の安らかな睡眠を得るのがせいぜいなのである。

佐々木雅發は、「私」が先生にあこがれる理由として、先生には優雅な生活ができる財産のあることを指摘し、彼が「定職こそなくとも、いやないからこそ実現しえる一種深沈たる生活の体現者であるからに他ならない」と述べている。これは、しかし、「私」の「真面目」な面を見損なってはいないだろうか。鎌倉で「一人ぼっちになった私」（上一）が、似た孤独を抱えた先生を「どうもどこかで見た事のある顔のように思われてならなかった」（上二）ことをきっかけに、初めは「単に好奇心」（上二）から、そ

してしまいには「真面目」に迫る共感を重視したい。[15]

注

（1）「『こころ』を生成する心臓（ハート）」（『文体としての物語』筑摩書房、一九八八年）など。
（2）『『こころ』大人になれなかった先生』（みすず書房、二〇〇五年）など。
（3）『夏目漱石（増補版）』（勁草書房、一九六五年）。
（4）『漱石試論』（角川書店、一九七一年）
（5）『夏目漱石論』（河出書房新社、一九七二年）。
（6）『漱石の「こゝろ」を読む』（翰林書房、二〇〇九年）。
（7）「漱石研究」第六号、一九九六年。
（8）「夏目漱石『こゝろ』」（「大阪大谷国文」二〇一五年）で触れた。
（9）「夏目漱石『こゝろ』」（「大阪大谷国文」二〇一六年）で触れた。
（10）『志賀直哉論』（文芸春秋社、一九五四年）。
（11）個人的な回想になるが、バフチンの翻訳者新谷敬三郎が講義で余談のように、「白樺派の「自分」が気になる。「自分」と「私」は似ているようだけれど微妙に違う気がする」とつぶやいたのが、三〇年経っても頭に残っている。
（12）以下くわしくは（8）参照。
（13）くわしくは（9）参照。
（14）以下くわしくは（8）参照。
（15）私の講義での学生の読みやすさを考慮し、あえて新字新仮名を使用し、周知のエピソードなどもくわしく引用する形をとった。

（本学日本語日本文学科教授）